
devilangel

琴李

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

devil angel

【Nコード】

N8910X

【作者名】

琴李

【あらすじ】

青子は人間を墮落させられない悪魔。あまりにも実技の点が悪いので、紅子に呼び出されて人間界へ向かうことに。目的は運命の恋人、工藤新一と毛利蘭を出不逢わないようにすること。しかしそこで出会った黒羽快斗とそのマジックが、青子を戸惑わせ胸を高鳴らせて彼女自身の運命も動き出す……。絶えず状況が揺れ動く過酷な状況に翻弄される青子に快斗が向ける想いは、果たして実を結ぶのか？

このお話は、青山ワールドMIXパレルです。上の諸事情により多少残酷な表現もあります。その他については『注意事項』をよく読んで、納得の上お楽しみ頂けると幸いです。

注意事項（前書き）

原作の関係しか認められない方には申し訳ないので、はじめにこんなページをつくりました。

何が来ても文句ない、どんとこいという場合は遠慮なく飛ばしてください。

また、こちらに書いてあることには文句言われても困りますのでご了承ください。

注意事項

このお話は、まじつく快斗＋名探偵コナンのMIXパラレルですが、一風変わってます。私の他の話からも分かると思いますが、またパラレルゆえ、若干のキャラの崩壊は見逃してください。ジャンルは……一応恋愛だと思いますがそれだけではありません。また、怪盗と探偵の攻防にも微力ながら全力投球してます。一応漫画を何も知らなくても、分かるように書いてます。

簡単に確認できるポイントです

- ・まじ快よりです。主人公は青子ちゃん、ヒーローは快斗君です。（一応新蘭もあります）

- ・幼馴染設定は大阪コンビのみです。

- ・キッド出てきます。設定は原作とおりです。

- ・新一と快斗は原作どおりライバルではありますが、ちょっと関係が複雑です。

- ・魔法的要素、あります。ベースがベースだけに。

- ・脇役愛してます。これは譲れません。

- ・若干砂吐き注意報が出ています。なんでこうなるんだか全く分からないんですけどお坊さんコンビを書くとしても……（遠い目）。

- ・パソコンで書いているため一話が結構長いです。パソコンから読むか、1ページの表示文字数を最大にすることを強くお勧めします。
- ・結論として、誰も見たこともない話であることはお約束します。
- …お楽しみいただけたら幸いです。

最後に、このお話は完璧なフィクションです。主要人物以外に登場する人物の名前、ビッグジュエル、一切モデルはありません。ご

気分を害されませんよう、あらかじめ申し上げておきます。

大丈夫、という方、次のページから本編です。

あとは好き勝手書いただけなので好きにどうぞ。飛ばしてもなんら問題ありません。

【登場予定人物】

まじつく快斗…青子・快斗・探・紅子・恵子・中森警部・寺井ちゃん・紅子の執事・組織の人間
名探偵コナン…新一・蘭・園子・和葉・平次・目暮警部・コナン・哀・鈴木財閥会長・鈴木朋子
その他、キッドが変装で関わる人たち・警官さん

名前のない人も多数登場します。だって彼らはそこで生活送ってるんですからね……。

青子ちゃんについて

私はとにかく結構辛い現実生きてるにもかかわらず、いつまでも純粹で無垢な青子ちゃんが好きで、もはや天然記念物だと思っています。

で……とにかく誰でもない青子ちゃんを主人公にした話がつってあげたかったのです。

なんであんなに可愛いのに、原作にもちょこっと出るだけで、コナンには登場すらしないんだあの子はっ。絶対損してるっ！という脇役愛から出来た話です。そして青子ちゃんを好きになってあげて欲しいです。願わくばコナンの映画に登場するくらいに（笑）。

ただし役柄と演出上仕方なく非道になってる箇所があります。勿論普段はあの、可愛い青子ちゃんです。もっといえば極力青子ち

やんに非道な行動を取らせたくなくて、ない知恵を絞りまくりましたので、青子ちゃんが好きで私の許容範囲となりましたけど……
というかそこまで読んだらきつと青子ちゃんに共感してくださっているありがたい方しか残らないのではないかなと思ってます……はい。

前書き・あとがきについて

基本的には書きません。世界感壊れるので嫌いなんです。ですが、知識面で参照にしたものがあつた場合は、最後に参考文献として載せます。興味がありましたら是非どうぞ。また、その際にはちよこつと気持ちを書いたりすると思います。調べる「結構思いいれがある回になる傾向があるので。

能力の限界について

一応今回自分への取り組みとして、キッドの登場場面やら推理シーンやらは逐一書いていってますが、私のない頭では矛盾点もたくさんあると思います。もしお気づきの点がありましたらご指摘いただけますとかなり嬉しいです。今後の糧にしたいと思います。さらにキッドの手腕については、あんまり深く考えず、生ぬるい目でみてやってください…。これは快斗のマジックについても同様です。タネなんて考えてません……。できそうではありますが……、調べてみたところ、快斗のあの一番有名なバラのマジックすら、簡単にはできなさそうなんですよね。

では、ここまでお読みくださりありがとうございました。
本編をごゆっくりお楽しみください。

1・遠くて近い空の下で（前書き）

プロローグの代わりに

たとえ、どんな思惑を持つてそこに存在していたとしても、行動も思考も全て、その目的のためとは限らない。だから……隣で笑っていたことは、嘘じゃない。それだけは、お願い、覚えてて——快斗

1・遠くて近い空の下で

「あーどうしょ……」

一人の少女が長い廊下を歩きながら呻きつつ、頭を抱えていた。その手に握り締めているのは紙一枚、何度も覗き込んで溜息をついている。しかし、既に記載されているものは、いくら睨みつけても結果は同じだ。

「やっぱりこうもはつきりでちゃうと焦るよね……」

空笑いしてみるも、当然元気など沸いてこなかった。

「青子ーっ」

悩む少女の背後から大声で飛んできた名前に、彼女は軽く肩を跳ね上げた。胸を押さえながら振り返る。

「け、恵子っ」

「え、どうしたのそんな顔して」

驚かせたことよりも、思わず聞いてしまうほど調子が悪かったのか、心配そうに眼鏡の奥の瞳を曇らせている恵子に、青子と呼ばれた少女は無言で一枚の紙を差し出した。受け取った恵子は怪訝そうに紙を見ている。

「えっこれって成績表じゃない……あーほんといいな青子の成績ついていたら……ああ、なるほど」

優等生と言われた青子のその紙を初めは羨望と尊敬と多少の皮肉も込めて見ていた恵子だが、やがて納得顔で顔を上げた。

その目の前にはがくーっと音が着きそうなくらい落ち込んでいるクラスメイトであり親友。

「実技、赤点なんて……やっぱり才能ないよ青子」

「いや青子、才能あるかないか以前に、すでに私達はそういうモンなんだけど……？」

「でもっでもっ実技だけ点数低いなんて悪魔失格だよーっ」

二人がいるのは廊下は廊下でも魔界の学校の廊下、薄暗くて不気味だと人間なら思う雰囲気のところだ。当然というべきか青子の背中にも恵子のそれにもカラスの様に黒いいびつな翼が生えている。ただ、彼女達に尻尾はないというのが想像と違うところだろうか。彼等に言わせれば『猫でもあるまいしそんなもの不要』という結論が、ここ数百年の間に出来上がっており、今はわざわざそんな無駄なものを持った悪魔など生まれてこないのだった。

「失格ねえ……次頑張ればいいじゃない」

恵子がまあまあと青子の頭を撫でようとするが、それを彼女は突っぱねてぶんぶんと首を大きく振る。その勢いに驚いて恵子が目をぱしぱし瞬いていると、青子は今にも泣きそうな顔で訴えた。

「だって……わかんないんだもの！ どうすれば人間を不幸に出来るのかなんて！」

悪魔として本気でそのレベルで悩んでいるのなら相当な問題である。恵子は慰めるのとからかうのを同時に諦めた。

「それは……人間が嫌だなんて思うことが起こるように仕向けられないのよ」

「どんなこと？」

「それは自分で考えて。……まあヒントを出すなら、恋愛関係のもつれとかね」

「恋愛？」

青子は首をかしげて恵子を見る。恵子はその行動に一瞬固まっていたが、次の瞬間には一人で深く納得した。

「そうよ、あんた恋愛したことないから点数稼ぐポイントがつかめないのよ！ ちょっとは恋愛しなさいよ。その辺の男子、いくらでもいるじゃない」

しかし、言われて俯く青子の声は、本当に弱弱しかった。

「だって……青子が気になる人っていないんだもん」

青子は純粹少女であるためか、理想がとても高かったりするので

なかなか恋に落ちないのである。一方でそのかわいらしさのため言い寄る男の数は数知れずなのだが、彼女がそれに気がつくほど敏感ではないというのが運の尽きであった。

「へ、へえ」

それらのことを全て了承済みの恵子は自分で振っておいたとはいえ一歩間違えればこめかみがひくつくような話題に、深呼吸をしながら耐え堪える。この点について議論してもしょうがない。なんとって青子が全くの無自覚なのだから。

「どうしたらいいの、恵子？」

「どうしたらって……」

泣きつかれた恵子こそが誰かに泣きつきたいと、思い始めた時だった。

「チャンスを上げましょうか？」

凜とした空気がその場に充満し、二人が思わず動きを止めるのと、言葉が聞こえたのは同時だった。

「あ、」

二人で同時に振り返ると、そこにはその尋常ではないオーラをかもし出している張本人がその雰囲気にしたがわぬ居住まいで立っていた。

「青子さん…あなたの実技以外の点数は素晴らしいわ。そんな逸材を放っておく手はなくてよ」

「紅子先生……」

すらりとした長身と、つやめくストレートの長い髪、極め付けに常に浮かべられている穏やかな微笑。彼女こそ魔性の女と言われ続ける青子たちの師であった。とても若く見えるが、年齢が不詳なのは言わずもがなである。

「あの……チャンスってどういうことですか？」

その空気に飲まれそうになっている二人だったが、意を決して恵子が尋ねた。紅子は少し微笑む。

「青子さん……貴方には、邪魔してもらいたいの」

「邪魔？」

「そうよ。ある二人が出会うのをね」

微笑を浮かべたままの紅子に青子は首をかしげた。

「……それってなにか意味があるんですか？」

「勿論よ。彼らはね、あまりにも幸せなカップルなのよ」

「幸せなカップル——」

ふと、そんなフレーズを聞いたのは子供の頃に読んだ童話の世界だったなと青子は思う。頭をよぎったのは王子様とお姫様。こうして成熟一步手前まで来ても、そういう考え方は変わらなかった。

しかし彼女がそんなことを思い巡らす間にも紅子の話はどんどん進む。

「これまでも前世で何度も何度もこちらの頭が痛くなるほど愛しあっているのよ。彼らがいるとその周辺での恋愛のいざこざが激減してしまうの。一番困るのは、その魂は天使の庇護下にあつてこちらからは手出しができないこと。それでも、なんとか今回はこちらの先手を打ったおかげで、今はまだ出逢っていないの。けれど細心の注意を払っていたにも拘わらず、あの二人は強い力で引き合つて、私達に逆らつてきたのよ。用意されている運命のわずかなほころびを通つて、このままではもうすぐ出会つてしまうわ。そうなたら一体どれだけの悪がこの世から消えるか、想像も出来ないのよ。青子さん、これは魔族の存続が掛かった大きな任務なの」

「で、でもっ！ 出会いたい人を出会わせずにいるなんてっ」

「あつ馬鹿っ」

淡々と続く話を想わず叫んでさえぎつた青子とそれをとめようとする恵子だが一度出た言葉はもう戻らない。彼女の本質が現れた瞬間に、紅子の冷たい視線が飛んだ。

「青子さん……貴方それでも悪魔なの？」

「っっ！」

「ちよっ先生いくらなんでもっあ、青子っ気にしないで、ね？」

しかし青子はゆっくりと首を振ると、決意を込めて目を閉じる。頭の中に出会ってもいない運命の恋人達を思い描きそこに無理やり大きなバツテンをつけたのだ。この瞬間、彼女の中の王子様とお姫様の像は、びりびりと音を立てて破られた。

「二人が…出会わないようにしてきます」

「青子っ！！」

「そう……やってくれるのね」

恵子の必死の叫びにかき消された紅子の淡々とした声を聞きながら、青子は自分でも恐ろしいくらい冷静になっていることに気がつく。そしてそれが自然だと何処かが知っているのだ。頭でどんなに抗っても、やはり本質は変えられない。

「はい」

その目は揺るぎなく、しかし微かに濁っていて、先ほどまで泣きついていた彼女とは別人だった。恵子を見た途端に何もいえなくなる。どうしようもない胸騒ぎがするがそれを押さえ込んだ。

「じゃあこれからすぐに出発してもらうわ、ついていらっしやい」

無言であとに続く青子を見て恵子は顔を歪ませた。

「青子……」

無理やりに呼び起こした悪魔の本質を、一番後悔するのはきつと彼女自身だと恵子は確信を持っていえる。自分は、いざという時に冷徹になりきれる。人間を不幸にすることも悪魔の性が楽しいと感じたことも何度もある。

けれど彼女は、彼女の心はそんなこと絶対に出来ないのだ。それぐらい分かる。いや、して欲しくない。純粋な彼女のままでいて欲しい。それは彼女の勝手な願いなのだけれど

「青子は……天使に生まれればよかったんだよね」

そうすれば本当に人を幸せにするというそれだけのことを考えて生きていればいいのに。

「つつ馬鹿っ」

不謹慎な発言に気がついて恵子は自分で頭を叩く、それから周りを見回して誰もいないことを確かめると

「はーーーーーっ」

重たい重たい溜息を吐き出したのだった。

魔界から上とか下とかそういう概念を飛び越えた場所、いわゆる私達の住む人間界のある高校の寮の一室で、一人の少年が丸椅子に座り不機嫌そうに、ブラツクの苦ーいコーヒーを飲んでいた。
「なー新一、そんな顔ですつ」といると眉間によった皺戻らなくなるぜ？」

その隣で丸椅子に横向きに腰かけて、同じようにコーヒーをただしこちらはクリーム色に近いような砂糖たっぷりのカフェオレを飲みながら、心配半分呆れ半分で勉強机に頬杖を付いている少年が一人。どちらも年は同じくらいに見える。いや、同じ制服を着ている上に二人の顔は恐ろしいほどに似通っていてそれが同年齢だと暗に告げていた。違うのは髪形くらいだ。ちなみにふわふわと無造作に跳ねている方が甘党のようである。そして口を開いたのはストレートに髪をセットした少年だった。

「誰のせいだと思っただよ、バ怪盗」

途端に甘党の彼の顔から余裕が消え、顔面蒼白になった。

「おまつ寮ではやめろっ誰が聞いているかわかんねんだからっ」

「……だったら今すぐこっから消えろよ」

「そうしたいとこだけど、ここはオレの部屋、おまけに危険因子撒き散らすの見過ぎすわけにいかねーっ」

椅子から立ち上がり一人でヒートアップしていくその会話の内容は、少し世間一般から外れているにしても怒りは甚だしく、さらにいうならばもう一人、新一のあしらう冷たさも尋常ではなかった。

「うつせえな、オレは眠いんだよ」

「オレだって眠いんだっ！ はつきり言っただけでも寝たいっ」
「だったら寝ろよ、ベッドあるだろ」

面倒くさそうに後ろの二段ベッドを指差す。しかし彼はそちらを見もせずに、つかつかと新一に歩み寄った。

「生憎オレは、不機嫌な親友ほっぽり出してグーグー寝れるほど人間捨ててないんでねっ」

どうやら、彼は目くじら立てて怒りながらも非常に遠回りに新一の心配をしているらしい。しかし、当の本人はソレを逆に迷惑そうに見ていた。

「だれが親友だよ……大体、大バ怪盗が逃げ回りさえしなきゃ、こんなに不機嫌じゃねーんだよ」

「そりゃ逃げるだろ、捕まるわけにはいかねーんだからっ」

「ったく……さつさとパンでもドラム缶でも見つけるよな……」

「新一っ頼むからもうこの話題やめてくれーっ」

少年は既に半分涙目であった。世間一般の常識として隠したくない奴などいないだろうが、日曜日のうらかな陽だまりの中でその涙声はかなり不釣り合いだった。

「とにかくお前はでてけバ快斗」

「やっと名前呼んでくれた……」

どこかほっとした様子の怪盗こと快斗は、安堵の溜息をこぼす。

「とつとでてけっ」

「はいはい……」

半ば追い出されるように、しかし何処か嬉しそうに快斗はその部屋を出たのだった。

「漸くかよ……長かったーっ」

扉が閉まって歩き出し、そういった彼の声は俯いている割に若干

弾んでいた。どうやら彼のことを名前で呼ぶ「新一のお許しが出る」という合図らしい。それがいかにまわり付いてきて面倒だからという理由であろうとも、快斗には嬉しいことだった。

彼の名前は黒羽快斗、この現代社会ではありえないほどのロマンスを背負い生きている高校生である。彼は先ほどの会話の通り、怪盗なるものを行っているのだ。しかも予告状まで送りつける本格的なものである。勿論愉快犯ではなくちゃんとした理由はあるのだが、それはそれでまた話す機会があればということにしよう。

「……相部屋なの恨んでるわけじゃねえけど……やっぱ探偵はなあ……」
新一とは長い間の親友で、それは過去形ではなく今も変わらないと少なくとも快斗は信じている。

けれど、快斗がとある有名な怪盗となった時から、そしてまた新一が、迷宮入りしそうな難事件（主に殺人）を次々と解決して国単位で有名な名探偵として名を馳せていることから、二人の関係はギクシャクとするようになってしまったのだ。

追うものと追われるもの、決して相容れないそれは小説の中だけの話だったはずなのに、いつのまにか、現実には確かにあるものになっていた。その事実が、知れた途端に10年以上にわたる二人の絆を揺るがすには十分なほどの信憑性を持っていると知る、という知らないおまけつきで。

ただ、お互いに、その立場を降りるつもりは微塵もなく、むしろ普段はあり得ない関係のライバルとして対峙する時に心地良い高潮感が二人の間を駆け抜けることにもなっていた。けれど……けれど……

「フィールドアウトぐらい、させてくれないじゃん……」
予告状を出すところから戦いの幕は上がり、そこから先の二人の

会話は予告日当日まで腹の探りあいになるのでどちらからともなく自重するようになるのは序の口。当日現場で対峙してなんとか勝利を納めほうほうの体で逃げ帰ったとしても家に帰ればまた顔を付き合わせることに、不機嫌な彼の相手をしなければならぬのだ。そこには以前のように彼の陽気さに若干呆れながらも芯からは嫌わず、名前を呼んだ彼はいない。心底嫌そうな睨みと、得意のサツカで鍛えた蹴りが飛んでくるだけだ。

その事実が快斗が怪盗になって唯一後悔していること。

それは二人が同じ高校に入って、たまたま相部屋になってからの変化だったからどうしようもないことだし、絶対に言いはしないし、怪盗をやめる理由にも届かないけれど。

「なんか、楽しいこと落ちてねーかなあ」

そんなことをつい呟いてしまうほどには、彼はこの毎日に疲れていた。

外に出ても寮を一回りするぐらいしかやることがない。疲れきった体をそれ以上使う気にもならず、快斗はぶらぶらと歩いていた。ただ、そうしながらも頭では次の獲物のことを考えてしまっているのだから、一種の職業病である。この東京のいたるところで、怪盗の獲物は姿を現す。

「……はあ……可愛い女の子とか落ちて……うわっ？」

そんな中、冗談交じりに言った言葉にどれほどの威力があるのか彼は後に親友に向かい力説したのである。それはある意味とても、正しかったのだった。

集団の場合は先生達が一斉に魔法を用いて瞬間移動を行なうが、個人で人間界に続く道は真つ暗なトンネルの中を通っていくという

シンプルなもの。理由は悪魔の能力に関係ないようにである。つまりえいやつと何かを魔力で動かしたり壊したり叩いたりする必要は全くない。さらにどんな馬鹿でも試験の点も関係がない。勿論心情検査なんてものもない。

「どうせなら、関係あればいいのに……」

そうすれば、こんなに嫌な思いのまま行かなくても済む。青子は深々と溜息をついた。つまりこれだけまだるっこしい言い方をして最終的には、行きたくなくても行かねばならないという一点に尽きる。

これが、どれほど割り切ってみても変わらない彼女の本心。出会うべき人間を出会わなくすることで不幸にする。悪魔の一般的な任務からすればとても簡単なことのようにも思えるが、青子にとっては荷が重いのと辛いのとで小さな肩がつぶれてしまいそうに感じることだった。

「はー」

しかし、いつまでもくよくよしては、点数に響く。紅子の部屋を出た瞬間から任務という名の課題試験は始まっているのだ。もしも今度合格点に届かなければ、青子はこんどこそ悪魔失格で消滅までの道をまっしぐらに進まなければならない。悪魔にとってそれほど恐ろしいことはない。

青子は意を決して、その暗いトンネルの中に飛び込んだ。

暫くは何も起こらず、青子はびくつきながらも一步一步確実に進んでいった。しかしそんな彼女の態度が『トンネル』に伝わったのか、確かに今までであったはずの地面が急に消えた。勿論真っ暗の中それに気がつけるようにはなっていない。となるとあとは簡単なことだ。

「きゃーーーーっ」

翼を使うという簡単なことすら思いつけないほどパニックに陥り、青子は下へ下へと落ちていった。

その迷路のような穴の中を、ひたすら滑るように落ちていく。目を白黒させながら気絶寸前の恐怖だったが、翼を開こうという思考に到ってもそれが出来ない。どうやら任せろということらしい。

誰にも教えられなかったその移動手段にも慣れてきた頃、漸く終着点が見えた。

そのときにそれは起こったのだ。

今、青子の目の前には二つ大きな穴が開いていた。どちらに落ちても、恨みつこなしというほど距離は同じ。しかし青子にはなぜか一方の穴に無性に呼ばれたような気がした。そしてそれを疑う暇もないくらい落下速度は速く、迷っている時間はなかった。結果、青子はままよとばかりにその呼ばれた方の穴へとわずかに体を傾けていた。

そして彼女はその穴に飛び込んでいったのだが、それが別の運命の始まりだったなんて誰が知りえようか。

ずしーんっ

女の子が落ちるには少々派手な音を響かせて、青子はお尻をしたたかに地面にぶつけていた。

「いったーんなんのよこれー」

びりびりとしびれる体をさすりながら、落ちてきた空を恨めしげに見上げるが、既に穴は影も形もなかった。

「ありえない……」

誰も教えてくれなかった穴の強行手段に青子はひとり悪態をついた。

痛む体を抑えながら周囲を見回す。どうも足もくじいてしまった

らしく立ち上がれない。

地面は砂だった。コンクリートだったらもつと痛かっただろうと思うので、それはとても幸いだったが、砂だらけの自分のスカートを
見る限りそうも言っていられない。青子はゆっくりと溜息を吐き出した。

目の前に見えるのは花壇のようだが、手入れがされている様子はなく、育てられた植物の代わりに雑草が伸び放題になっていた。どうも建物と建物の間に落ちたらしく、青子がいるのは、その忘れさられている空間のさらに奥まったどん詰まりだった。空が切り取られて小さく見える。雨は降っていなかったが、太陽も出ていない曇り空で現在の青子の視界は大方灰色と茶色だった。

とりあえず、はっきりわかることは現在位置確認及び把握は不可能ということ。

「……どうしょ」

途方に暮れる青子がまた溜息をついたときだった。なんと正面の壁をくるりと回り何者かが走ってくるのが見えたのだ。

（だ、だれっ）

青子は非常に慌てた。当然である。この場所が何処かも分からないのに、出会う人物に怪しまれない可能性のほうが少ないのだ。出来るなら、回れ右してくれるか時が止まればいいと真剣に思う。

しかし青子の必死の願いは勿論無駄に終わった。少年と分かるほど近寄ってきた彼は、走るのをやめ、青子の前まで止まることなく歩いてきたのだ。

「うわー！ーほんとに落ちてた……」

少々、意味不明な言葉と共に。

しかし、たとえ相手が精神異常者かもしれなくても、青子は正常な一般人間を装わなければならない。どんな状況であっても人間に溶け込むことが任務の大切な第一歩なのだ。

「あつ初めまして……その……」

「参ったな……ここ、男子寮なんだけど」

なけなしの勇気を振り絞り、なおかつ声が裏返らないようにという多大な努力をしながらの言葉を完璧に無視し、ぽりぽりと頬をかきながら空まで見上げている少年に青子は自己紹介するタイミングを完全に失った。

「へっ？」

「君どっから来たの？」

ふわふわと髪を跳ねさせた少年は、青子に目線を合わせるなり、彼女の驚きを消し去るくらいの人懐っこい笑みを浮かべながら穏やかに聞いてきた。その顔がまたとても整っていて、見ほれてしまい思わず緊張がゆるむ。とりあえず今ここにとつて食われるという危険と精神異常者という可能性は消え去った。しかし――

「……………あ、青子は……………えっと、その……………」

今までに全くないパターンで、青子は言葉に詰まった。何もいないまま時が静かに流れていく。

「まさかその年で……………迷子？」

やがて少年は時間の経過と共に変化した顔と同じくらいの呆れまじりの声で聞いてきた。しかし青子はもう天からの助けとばかりにそれに飛びついたのだ。

「うんっ青子迷子なの！」

「へー……………」

「……………」

自分で言っておきながら、明らかに信じていなさそうな少年の声に青子は腹がたってきた。ついさっきまで綺麗に見えた顔も、今は意地悪く笑っていて反感を覚える。もともと意地っ張りな青子はムキになって顔を上げ、思いつくままに叫んでいた。

「青子はねっここに友達に会いに来たんだよっ！ だけどこの町初めてだから分からなくて、やっとたどりつけそうだったのに、地図なくして道分からなくなっ……………それで……………」

言っているうちにだんだん目頭が熱くなってきた。なんだつてもとと苦手な嘘をこんなについているんだろ。それもこれも無性にあの穴に呼ばれたせいだ。もしも反対の穴に飛び込めば、今頃ちやんとした場所に着地できていたかもしれないのに、あんなに強く惹かれた理由が分からなくて悔しい。

「だからっ青子は本当に――」

「ああ、分かったって」

なだめるように言われた声に顔を上げれば、先ほど胡乱な目をしていた彼が、少し困った顔で青子を見ていた。そんな顔をされると余計に惨めに感じて、そして急にひざが痛くなつて。

「ふえ……」

青子は溢れる涙をそのままに、泣き出した。

「おっおいっ何で泣くんだよっ!!」

突然のことに少年は慌てふためいて、青子を見る。しかし肝心の青子にはもうどうして泣いているのかも分からなくなっていた。ただ泣きたかった。いろんなことがありすぎて、辛くて悲しくて痛くて、それぐらい現状とそこにたどり着くまでの道に不満だらけだったのだと涙を流して初めて気がつくくらい一杯一杯だった。

「なあ……泣いてちゃ分かんねえよ……何があつたんだよ」

「どうして……なんでよっ……なんで青子はこんなところにいるのよーっ」

随分と柔らかくなった彼の声も聞こえているのかいないのか支離滅裂に叫びながら、いつのまにか同じ目線になっていた彼の肩をどんと叩く。完全に錯乱状態に陥っていた。

(おいおいおい……)

快斗は少女にされるがままにされながら内心で途方に暮れていた。目の前の少女は地震のような地面の揺れと共に現れ、しかも出会っ

た途端、言葉を数個かけただけで泣き出してしまった。少し言い方が意地悪だったかもしれないがその時は反論してきたからそれが直接の原因ではないはずだ。

だからこそ考えてもわからなかった。

快斗は暫し迷った拳句いまだ泣きじゃくりながら目をこする少女の目の前に、手のひらを差し出した。少女の意識がそこに向けられたのを確認すると、その手で小さな魔法をひとつ。

ぽんっ

何もなかった掌に、浮ぶように赤い薔薇が現れる。

「えっ……」

「オレ、黒羽快斗ってんだ。よろしくな」

目を丸くしている彼女の目の前にそれを差出し、飛び切りの笑顔を向けた。

女性にはやさしく、それが基本だよ、快斗

それが幼いときから今は亡き父に言われ続けてきたことだった。

「今の……なに？」

突然のことに思わず泣くのを忘れて、その薔薇を呆然と見つめている彼女に快斗は微笑んだ。

「マジックだよ。オレの得意技なんだけど……見たことない？」

「うん……こんなのはじめて……でもすごいねっありがとう！」

青子は頷き、まるで何かが飛び出してくると思っっているかのように恐る恐る薔薇を受けとったが、何も起こらないのを確認すると彼を見て急にばああつと嬉しそうに笑った。

「つつ！？」

その大きな瞳に自分が映りこんでどくつと快斗の心臓が跳ねたことは、今までになかった経験だった。動揺した快斗が思わずパワー

「フェイスが剥がれかけてしまうほどの。その後はなんとか持ち直したものの、彼女から視線を逸らし、思っていることを口に出すので精一杯になってしまった。」

「だったら、もう泣くなよ……な」

「うん……ありがとう」

高いソプラノでお礼を言われるたびに動機が早くなる。そんな自分にはつきりと違和感を感じながら、快斗は遠慮がちに手を差し出した。彼女はまだ、地べたに座り込んだままだ。

「オメー……一人で立てるか？」

「あ、うんっ」

しかしほんの少し足を動かした途端顔を歪めた青子に、慌てて快斗は彼女の体を支えた。

「おいっ無理すんなよっ！ くじいたのか？」

「……うん……ちよつと落ちた時に……でも大丈夫」

気丈な言葉に快斗は彼女の足を見て眉をしかめた。くじいただけでは済まず、膝を派手にすりむいて真っ赤な血が砂と混じっていて直視するのも辛い。経験から考えるまでもなく相当痛いだろう。

「大丈夫なわけねーだろその足でっ……とりあえず洗えるところ行くぞ」

快斗の真剣な有無を言わせない口調に青子は諦めたように頷いた。

「うん……」

「よし、じゃ乗れ」

「なっ!？」

青子の目が瞬時に見開かれる。彼が青子に背を向ける格好で、しやがみこんだのだから無理もない。そうしながらこちらを見てくる快斗に、青子はぶんぶんと首を左右に振った。

「いいから乗れっ。なんもしねーよ」

そういう問題ではないのだ。彼の意味は聞かなくても明白だが、会って数分の彼にそんなことさせられるはずがない。どんなに彼が親切ですごい人だろうとそれはまた別問題である。

確かに足は痛い。既に刺すような痛みではなく、鈍痛になりつつあるがどちらにしろ手当てが必要であることは明白だった。本当にひねってしまったかもしれない。そう思えば思うほど不安は大きくなるばかりだ。だから彼の言葉に従ったほうがいいのだと思いはするのだが……。

「青子、ほら、さつさとしろってっ」

「なっなんで名前!？」

突然呼ばれて慌てふためく青子に、快斗は呆れた目を向ける。

「さっき自分で言ってたじゃん。大体他に呼ぼうにもオレそれしかお前の名前知らねーんだよ」

「あ……そっか」

「ったく……乗らないならオレ帰るけど？」

立ち上がりかける快斗に焦り、思わず青子は問いかけていた。

「……ほんとに何もしない？」

「ったく信用ねえなあ……そんなにオレ悪い奴に見える？」

青子は即座に数度首を振った。あんな素敵なものをを見せてくれた彼をそんな風にはとても見られない。快斗は青子の反応を見てにんまりと笑った。

「んじゃ決まりだな、ほら乗って」

「うん……」

こうしてすっかり快斗のペースに巻き込まれた青子は、その背中に負ぶわれて、この細い空間を去ったのだった。

その後青子は給水所で足を洗ったあとも、またうまく言いくるめられて快斗に負ぶわれてしまった。さらには、その背中があまりにも心地良かったのと疲れから、彼の背中でいつのまにかぐっすりと眠ってしまったのだった。

こんな一風変わった二人の出会いのワンシーン。

何かが始まる、そんな予感、あまりないような気がするけれど

しかし、これは確実に物語の始まりなのだ。たとえ劇的でなくたって。

2・番狂わせが肝心要

「……………で？」

たつぷりと間をおいて、漸く放心状態から我に返った新一が、扉の前に立っている元凶を親の敵とばかりに睨みつける。言葉の上では尋ねていたが、実質それは『問いかけ』ではなかった。

「いやその……ちよつと拾って」

空笑いをしながら、快斗はなんとか彼の目線からのがれようと視線をさまよわせる。しかしその傍ら滑り落ちないように背中の手を添えることは忘れない。反省するより始末が悪い。苛立ちを込めますます強く睨みつけると、ようやく「悪かったって……」という細かい声がした。

けれど新一にとって実は苛立ちの原因はそこではない。むしろ誰でもない彼ならこの状況に十分に理解をしめすはずである。だが、今回ばかりはそうも言えない理由があった。

快斗が出て行ってから、新一は扉に嚴重に鍵をかけた。彼が鍵を閉めても閉める前と変わらないということは中学生の頃から一般に良く知られていることだったが、それでもこれならば時間がかかるだろうと言えそうなほど頑丈な奴を、である。

それから、やっと訪れた平和な午後を読書に没頭して満喫しようと、本を取り出した。と思つたら、一人になつていくらしにうちにノックが数回。心当たりもないので訝しく思いながら溜息や諦めと共に机に出したばかりの本を置いた。そして重たい気分が出てみればそこにいたのは予想外にも快斗だったというわけなのだ。しかもただでさえ苛立ち度数が一気に跳ね上がった新一に対して、彼はそれだけでは飽き足らず妙な格好。もはやその理由と正体を見た新一が飽和状態に陥ったのも当然だった。

思い出しただけでもどつと疲れてこめかみがひくつくのを抑えられない。要するに、彼の平和な午後のひと時は彼が扉を開けた瞬間に消え去っていたのだ。そして新一にとっての問題はそれだけではない。

「人間を拾うなっ！」

言葉のまま批難しているのではなく、なぜか『快斗が』というのが単なる人助けではすまないような嫌な予感をひしひしと彼に与えてくるのだ。

「うわっしーしーっ」

大慌てで人差し指を唇に当てた快斗はしきりに後ろを見やる。彼が言葉ではなく大きさに待ったを掛けたのは、快斗の背中でもぞもぞと動く気配を感じた新一にも理解できた。仕方なく睨みつけたまま、口だけはつぐむ。

快斗は少女の動きが止まったのを見るとほっと息を吐き、その痛いほどの視線にも全く動じず部屋を横切っていく。

天幕を張ったベッドでもあれば様になるが、高校生のしかも寮の部屋にそんなことを期待するのが筋違いだ。当然快斗が青子を降ろしたのは、何の変哲もない二段ベッドの下のだ段だった。

「おいてめっ……」

混乱と焦りと怒りが混じった低い声が背後で聞こえても、振り返った快斗は余裕の表情だった。

「だってよ、この部屋ソファねーじゃん。それにさっきから起きそうなんだぜ？ 誰かさんのせいでー」

にやりと実に楽しそうに笑うと、快斗はぐうの音も出せない新一の隣を余裕で歩き去る。

「おいっ何処行くんだ」

新一が小声で問いかけた時、彼は戸を開けようとしていたが、振り返って同じく小声で答える。ご丁寧な唇に手を当てるジェスチャーつきだった。

「救急箱とりにいくんだよ。そいつ足怪我してんだ」

「怪我あつ!？」

「だからしーって」

ポリウムを下げることを咄嗟に忘れてしまうほどの驚きだったが、出てしまった以上同じことである。とっさに快斗はまた先ほどのポーズをしたが既に遅かったようだ。

「……う」

微動だにしなかった腕が大きく動いたのを見て、快斗は天井を仰ぎ溜息をこぼした。

「あーあ、起こした」

「……悪かったな」

快斗の視線が新一を避難すると、彼はそっぽを向いてしまう。快斗はもう一度溜息をつく、出ようとしていた扉を静かに閉めた。それから自分の机の方へと歩いていくと、椅子を引つ張ってきてそれに逆に座りながらベッドの前を陣取る。新一も暫く彼の行動を見ていたが、やがてそれに習った。

二人の視線がベッドに集中するのは興味深い光景であったが、目の前の少女は起きない。正確には目を開けようとしないのであった。尤もそれは快斗にも新一にもはつきりと覚えがありすぎるくらいある現象だった。せめてもの抵抗とばかりに浮上しつつある夢のふちを無理やりに掴んで離さない。要するに寝汚いのだ。スタンバイまでしてお姫様の目覚めを待っていた王子様二人には微笑ましい光景であったとしても、面白い物ではない。

痺れを切らした快斗は器用に足で、椅子をさらにベッドへと引き寄せると、少女に手を伸ばした。

「あーおこ、いつまで寝てんだ、起きろ」

新一が思わず目を剥くほど親しげな声で、快斗はぱしぱしと彼女の頬を手で叩いていた。かなりの呆れ顔だったが、それが本心ではないポーカークフェイスであることぐらい、彼の態度を見れば一目瞭然である。

そのように新一が冷静に分析する間にも、快斗の『ぱしぱし』は

続く。

「いーかげん起きろ青子、赤ん坊じゃねーんだからそんなに寝たら夜眠れねーぞ」

「んーもうちょつとだけー」

「だめだつーのに、大体怪我の手当てもまだだろーが」

「やーだー、青子まだ眠いのー」

「お前ら本当に今日初めて会ったのか？」

まだ会話のようなじゃれあいを続ける快斗に、たまりかねた新一が割って入ると快斗は振り向いたがその顔は困惑気味だった。

「そうだけど……何で？」

「何でつてお前な……」

ふかーい溜息をつく新一の方が困惑してきたところでその声が煩かったのか、青子がうつすらと目を開けた。

「お、漸く起きたか」

完全に視界の外に出ていたというのに快斗が素早くそれに気がついて、青子に向き直る。それにまた首をひねりたくなる新一だった。そしてそれをまさに実行しようとした時

「……あ……え………えー……っ？」

叫び声が部屋どころか寮中に響き渡るなど誰が想像できよう。おまけにそれが高いソプラノであったなら、男子寮ではまずないことで、当然寮二年目の二人の免疫もなくなりつつある。

「……っ！……っ！」

二人して耳を押さえて何が起こったのかわからずに目を瞬かせていると、目の前の少女が起き上がって二人を指差してきた。ふさいでいても全く効果なく、手を通り抜けてくるかのような高い声が驚いた顔に続く。

「ふ、双子！？」

「………違っっ」

全く同じタイミングで答えた二人には信憑性がなかったが、実際

に血のつながりは無い。なぜこんなに似ているのかといえば恐らく父と母の顔つきが若干似ているからだろうという結論にならざるを得ない。

だが、肝心の青子はその否定を追求はしようとはせず、そうなんだーと一人頷いていた。その様子に思わず二人は顔を見合わせる。恐ろしいぐらいのマイペースな少女に起きた瞬間から振り回され、不安になるのも無理はない。しかも彼等自身が第三者からマイペースだといわれているのであるからなおさらである。

「おい、青子……」

新一の疲労と恨みが混ざった一方的な目線に負けた快斗が恐る恐る声をかけた時にも、青子は「それにしてもほんとに似てるー」等と繰り返して呟いていた。苦笑も溜息もどつと押し寄せてきた疲れに押し流され、その勢いのままに快斗は言葉を出してしまっていた。

「おまえさあ……ずれてるって言われねえ？」

「え、どうして？」

「どうしてって……」

頭を抱えている快斗の横で様子を見ていた新一は密かに目を丸くしていた。新一でなくともそうだろう。彼がこんなに誰かのペースに巻き込まれているところなんてめったにお目にかかれない。

「とりあえず……目の前にいる男のうち、一人は全く見えず知らずのはずなのに、警戒心のかけらもねえってのはどうかと思う」

独り言として最低限度の現状を言ってみると、そのありえないほどの異常さに改めて気がついてまた一気に疲れる。

一方の青子は聞こえていたのか急に顔をこわばらせた。しかし、はつきり言って今更過ぎて滑稽以外の何者でもない。青子はそれが分かっていないのだろう。快斗によく似てはいるものの、快斗ではない新一をじっくりと見ていた。

この瞬間目は口ほどに物を言っていると痛いほど新一は感じたという。

「……工藤新一、よろしく」

あまりに初対面とは思えない対面の後の自己紹介だったので、全く緊張感がない。新一の苦笑交じりののんびりとした声に青子も小さく笑った。

「青子は……青子だよ、よろしくね」

苗字を言おうとしないのは訳があるのだろうと、彼は軽く流した。探偵として、踏み込むべき時とそうでないときの線引きを彼は人一倍分かってるのだ。

「それ結構珍しい名前だよな。なんか由来でも？」

そして彼は基本フェミニストなので、女性を困らせるようなことはしない。青子は笑顔のままだ。いやより一層楽しそうに笑っている。

「うん、青はサファイアの青なの。由来がとっても綺麗だから、青子気に入ってるんだよ」

連呼しているだけあって本当に相当気に入っているのだろう。そう結論付けた新一は苦笑気味の表情を崩さないまま、ずっと背後に意識をやった。先ほどから不機嫌なオーラがじわじわと漂ってくるのだ。

しかし新一は目の前の少女には顔色一つ変えずに問いかけた。

「えーっとじゃあ青子ちゃん、どうしてここに来たのか教えてくれる？」

「うん、いいよ。でもその前に工藤君、青子のこと呼び捨てでもいいよ？」

「いやそれはちょっと……初対面だしね。青子ちゃんもオレの事君付けだし。そんなことするのは……この馬鹿ぐらいだよ」

そこで彼は快斗のほうを振り向くと同時に、瞬間的に表情とかもし出すオーラまでも変えた。その速さたるや、ハリウッドスターも仰天ものだ。当然快斗もたじろぐ。

「なっなんだよ」

「なんだよじゃねーだろ、さっきから嫌なオーラ出しやがって気分悪いんだよ」

「なっ」

「大体なあ……なんで初対面から呼び捨てなんだよ。お前、普段のフエミニストっぷりは何処行きやがった？」

「な、何でそこなんだよ！ オレは別になんかガキっぽいからそう呼んでただけだし……」

「だってらせてちゃん付けにしろ、それと妙な不機嫌オーラ撒き散らすんじゃないよ」

「撒き散らしてねえっ！」

「ねえ二人ともどうしたの？」

二人でひそひそそこそやっていれば、気にしないという方が無理である。新一はそれを自覚していたのか最後にもう一度快斗を睨みつけると、青子に顔を向けた。既に快斗と話す前と同じ苦笑を顔に貼り付けている。

「なんでもないよ、ただ、青子ちゃんも女の子なんだから、警戒心は持ってたほうがいい。こいつは女性になら誰にでも優しいけど、用心に越したことはないしね」

「おいてめっ新一何言ってっ！」

血相を変えた快斗が新一に詰め寄るが彼はいたって涼しげな顔だ。
「本当のこといわれて怒るのか？ 問題ねえだろ」

「怒るのかじゃねえよ！ 変なこと吹き込むなよな！」

また始まった言いあい、ただし今度は音量調整なしである。青子は急に始まったそれにあたふたとするしかなかった。しかしぎぎぎとにらみ合う二人に、ついに実力行使に出る。

「二人とも喧嘩はやめて、青子これからちゃんと気をつけるから。えーっと工藤君黒羽君、青子のこと助けてくれてありがとう！」

ぴたつと動きを止めた二人。そして二人の瞳が青子をじっと見る顔だけ見れば整っている少年二人に見つめられ、青子は急激に赤くなつた。

「あ、えとその……」

しかし彼等にとって青子の変化が問題ではない。

「大バ快斗」

「認めるよ……たくつ」

快斗は立ち上がると足音を響かせ部屋を出て行った。不機嫌丸出しのその動きを青子は知らないうちに追いかけていたが、パタンと扉が閉まった途端にはつと我に帰る。

それを見計らい新一は声をかけた。

「青子ちゃん、大丈夫？」

「え……何が？」

「足、怪我してるんだよね」

「え、あ、ああそうだったっ！？」

自分でも驚いている辺り、この先彼女の将来が非常に不安になるが、新一はそんな思考を頭から追いやると、青子の足へと視線を向けた。今更だが、急遽水で流したことは分かってても、かなり痛々しい。幸い血は止まっていて毛布も汚れてはいなかったが、すり傷の痕はまだはっきりと彼女の足に残っていた。

「どうして、怪我なんてしたんだ？」

「ん……実は青子人を捜してて……って！？」

急に大声を上げた青子に彼女の足の怪我の状態を見ていた新一は不意打ちを喰らった。

「んなつ」

しかし青子はそんな彼の様子にはお構いなしでむしろさがるように新一を見ってくる。

「ねえ工藤君……あの、工藤君の本名、もっかい……」

「？ 工藤新一だけど？」

「嘘……」

信じられないと、現実を受け止められずにいるらしい青子と対照的に新一は何がなんだか分からずに眉をひそめる。思わずいまだに相当なショックを受けているらしい青子の顔と目を覗き込む。

「なあ……オレの名前がどうしたって」

その時パタンと扉が開いて救急箱を抱えた快斗が現れた。

当然、彼には事前説明などなく、二人がお互いを凝視して見詰め合っているような姿がダイレクトに飛び込んでくる。

「何してんだよ……」

それだけ言うのが精一杯だったようだ。

「快斗……誤解のないように言っておく」

胡乱げな目を向けられる新一は疲れた声だった。尤も青子の方は自分の世界からたった今もどってきたばかりで、当然何が問題なのか分っていない。快斗の眉の酔った顔を不思議そうに見ている。

「青子ちゃんがオレの名前に妙に引かかったことがあるらしい。それですつと呆けてたんだよ、な」

「あ、うん……ごめんなさい」

「謝ることじゃないよ、まあ吃驚はしたけどね」

新一は苦笑いだ。

「……新一の？」

「ああ、それだけだ」

「へー……別にいいけどさ。とりあえず青子、こいつには気をつけるよ」

「な、なにを!？」

「オコサマ……」

今度は快斗が疲れて、はあと溜息を吐く。しかしそれ以上は何も言う気がないようだった。

「ほれ、足出せ」

「なっ大丈夫だよっ青子自分で」

「ったく……」

快斗は微かに動いた青子の足にためらいもなく手を伸ばし、掴んだ。

「いついったー！ーいつ何するの!! 思いつきり握るなんて」

青子は悲鳴を上げ、涙目で快斗を睨んだ。忘れていた痛みが蘇る。それを聞いて少し苦笑している快斗。さらに黙って見ていた新一も苦笑いだ。

「オレ軽く握っただけだけど？ な、新一」

「結構痛めてるみたいだし、あんまり動かさない方がいい」

新一は同意こそしなかったが、その実快斗の言葉に付けたしたような忠告に、青子は黙り込んでしまった。

「……………」

「だからオレに任せろって、な？」

「………なによ、馬鹿快斗」

「青子ちゃん、こんなフェミニスト気取りはバ快斗でいいんだよ、舌かむぜ」

横から新一が知恵を付けると、青子は顔を上げて雲間から太陽が覗いたように顔を輝かせた。

「あ、そっかあ！ありがとう新一君」

ぽんと手を打って、しきりに頷いている。

「……………いえいえ」

「ケツ、どっちがフェミニストだよ」

快斗はそんな二人の様子にぶつぶつと呟きながらも、包帯を巻、かなかった。

かぶせたのは水色のふわりとしたハンカチ一枚。

「……………何する気？ 快斗」

「まあ見てろって」

「ったく……………」

今までずっと快斗に軽口を叩いていた新一がそう呟くなり、彼の方を見る。青子は二人の視線が一瞬交わったのを確かに感じた。

「……………ワン、トウ、スリーツ」

そして彼がハンカチをどけた時、そこには綺麗に包帯の巻かれた足があり、青子は目を丸くする。

「うっそーっ今青子何も感じなかったよっ」

絶対に自分の足に触れなければできない芸当なのに、瞬間的に感

覚がなくなっていたとしか思えない本格的な巻き方。青子はただだ、快斗と足を見比べるばかり。

「そりゃオレは、世界一のマジシャンになる男だからな」

「ほ、ほんとなのっ？」

快斗つてすごいんだね、と大きな瞳を更に大きくして、期待に胸を膨らませる青子に、快斗は得意満面の笑顔で答える。それに新一はあつとため息だ。

「大風呂敷広げて泣く羽目になっても知らねーからな」

「あれー新一？ オレがなれないとでも思ってるのかなー」

「……少なくともおじさんを超えるのはだいぶん先になるだろ」

「それについては否定はしねーけど、絶対いつかは超えてやる！」
拳を握りしめて熱く語る快斗を新一は冷めた目で見やる。

「おーおー頑張れ」

「言われなくとも」

二人は青子そっちのけで不敵な笑みを浮かべながら会話を続ける。そこは青子の知らない世界で、そしてそんな二人を見ているうちに突然彼女は気がついた。これからどれだけの長さ一緒にいられるのかなんて問題外、彼等に出会ってしまった、こうして一緒に会話していること自体が計算外なのだと。あと何分なんて考える間もなく、自分はもうここから消えなければならぬ。

親しくなんて、とんでもない。決心が鈍ってしまふ。

「ご、ごめん、快、黒羽君、青子もう行かなくちゃ……手当までしてもらって、本当にありがとう」

出来るだけ何も変わらないように、それが無理ならせめて別れを惜しむあまりに、無理な笑顔になっていると映るように、ぎこちなく笑う気持ちが屈折して届くようにと青子は願った。

しかし、彼は青子の言葉が聞こえるや否や、ぱっと彼女の方を向いたのだ。

「……それすつげー気持ちわりい」

しかめっ面で、青子に言う声まで、本当に気持ち悪そうで、しかしそれは具合が悪いという類ではなく、苛立ちを含んだものだ。

「か、黒羽く……」

「だからっ何で今更言い直すわけ？ 青子、こいつのことは別に工藤君でも呼び捨てでもいいからオレは絶対快斗って呼ぶこと、君付けも禁止っいいいな！」

いや、指を突き付けて宣言されても、困る。もう会う事はないはずなのだ。特に快斗に至っては姿を見せることすら、してはいけなはず。大体、ターゲットとの接触なんてかなり点数に響いているはずなのだ。これ以上点数を落としたら、消滅すら、してしまう可能性がある。

「いや、別にオレも名前でもいいけど……お前、青子ちゃんがここに住んでるかすら知らない癖によくまあそこまで」

新一が、青子の気持ちをかなり分かりやすい例を用いて説明してくれることに特に違和感も覚えないくらい青子は考えに没頭していた。一方で新一の説明をまだ不機嫌そうに聞いていた快斗は、やがてその蒼みがかかった瞳をまっすぐ青子に向けた。

「青子」

その低い声と瞳の圧力に、青子の意識は急激に浮上させられる。それだけの力が、その声と瞳に人知れずあることを、おそらく知っているのは新一だけだ。だからこそ、彼は目を見開いた。ここまでの事をして彼が固執する人間なんて、これまでにいなかった。いやもしかしたら自分だけがその対象だったせいで気がついたのかもしれない。たとえこの状況でも、見ていなければありえないと笑い飛ばすくらいには、彼はこんな空気を表に出してこない。

「な、に……？」

「青子は、もうオレらの友達だろ？」

「……え、いやそれは……」

彼女にとっては、突然の出会いで恩人であるが、ついだというかなり大きなウェイトでターゲットの少年達。もっと言えば、自分人間ですらなくて。それでも、そんな恵子のような存在になれるのだろうか。

青子にはよく分からなかった。気持ちを抑折させる要素が多すぎて。

「……えっと、あ、青子は……か、快斗の事も新一君のことも、大切だよ」

ただ、ついつい、瞳の圧力に負けてそんなことを口走ってしまうほどには彼等に好感を持っていて、感謝もしている。できるなら、彼らの日常にすこしでも溶け込みたいと願う位、気がつけば彼等が好きになってしまっていた。こんなに簡単に入り込まれるなんておよ信じられないけれど、全然嫌ではなかった。むしろ自分のことももっと知ってほしいと思ったし人間だったらすら思っ——

「つつあ、青子本当にもう行かなきゃつごめんね快斗、もう会う事もないと思うけどっ新一君もありがとっ」

「え、あ、ああ」

まだ少し、場の空気の変化について行けていなかった新一がこう返したのを皮切りに、青子は痛む足で無理矢理立ち上がると、ドアに掛けより、反射的に伸ばされた快斗の手をすり抜けて、消えた。勿論すかさず快斗がドアを開け直して、廊下に体ごと出した。しかしそこには既に誰もいなかった。あの怪我で、この速さで開けたドア、それなり続く長い廊下、階段までの距離。全てを考慮してもまだ足を引きずって歩いているだろうと信じて疑っていなかっただけに、快斗は驚きを隠せなかった。

「……ど、どうなってんだ？」

「え、いないのか？」

一方でその場から動いていなかった新一は、快斗の驚きによっ

く首をドアへと向ける。

「ああ……消えちまったのかも」

「アホかテメーは」

「……分かってるよ」

言うなり、快斗は駆けだした。その目を見た新一は、彼よりも先に悟る。

「なんであんな突っ走れるんだよ……」

初対面で名前しか知らない女の子。どこにでもいそうな、とはいすぎかもしれないが、とにかく女性なんて所詮染色体上では一種類だと思っている彼にしてみれば、呆れしか出てこない。自分にはわからない恋というもの。面倒で疲れるだけで。きっとそんなに想える女性なんて、夢幻、まさに針小棒大で。けれどその点について意見を交わしたことはなくても、ほとんど同じ見解だと思っていた彼の、全く違う結論を見せられれば、少しだけ、寂しいのだ。

「さっさと切り上げるよ……」

そして新一は、読書に戻ったのだった。ただ、そのページは5分経つてもめくられることはなかった。

「はいとこ、こうすればよかった」

そう、あの路地を曲がってくる彼に、出会うまでに。そうしておけば、ターゲットに姿をさらすなんて言う失態も犯さずに済んだかもしれないのに。

「………はあ」

姿を消してしまえば、青子は誰にも見えないし、気配を察知される事もない。彼からも逃げられることは間違いなかった。

つまり、快斗の言葉は真実だったのである。

ただ、いくら最大級の注意を払って風と同等の存在になっている

とはいえ、彼のすぐそばを通らなければならなかったのは、どういう理屈だったのだろう。たとえ、事実的には階段の位置を知らなかった彼女が、いったん戻らなければ階下に降りられないという、単純な位置問題が引き起こしたものであったとしても。

「青子……？」

絶対に察知できないはずの彼女の通った後で確かに振り向いて、その場をもう一度注意深く見た彼の声の、響きなんて。

知らずに済んだかもしれないのに。

青子はもう一度だけ振り返ると、自分を必死に探しているだろう彼の出す音からも逃げるようにその場を後にした。

3・思い出にはまだ早すぎる

街に吹き抜ける風は、身を切るようで青子の心の芯まで冷やしていつてしまう。冷たいのではない。悪魔の体感温度は常に一定だ。たとえ夏風でもこの感覚は同じだったはず。

一体あれから、どれほどの人とすれ違って、歩いてきたのか。青子にはそれすら分からなかった。目の前の景色はどんどん流れて行って、だから時間も同じくらい流れているのだろうか。

青子は痛い足を引きずり時折人にぶつかりそうになりながら、謝る気力もなくとぼとぼと歩いていた。俯き加減の彼女を誰も気にとめないのはこの時刻の問題だ。加えて街を歩く人々は木枯らしに身をすくませて皆急ぎ足。闇夜の迫る夕方に、他人のことなど誰も考えない。だから姿を現しているのは誰かに見えるようになった。透明なままでいたら、質量までは消せない青子は確実に誰かとぶつかって、大惨事になっていただろう。いつそのこと足の痛みも消せたらよかったが、悪魔は人間界に降りると人間の秩序を乱さない為に身体能力も人並みになり、異能もいくつかを残してなくなってしまうので、それは無理な話だった。かといって残った能力で飛ぶ気力もない。結局幾度となく舌打ちをされても彼女が無傷で済んでいるのは、単に彼等に見えるからだだった。

「はあ……」

空を見上げてため息をつく、その重さがそのまま自分にのしかかって来るかのようにだった。

どこに行くつもりも、行く場所も彼女にはないのだ。これからどうすればいいのかも一切分からない。

ここにきて出会った人間は、あろうことかターゲットの少年の親友と、そのターゲット本人。運がいいとは今回に限ってはとても言

えない。何しろ、お人よし青子が、しょっぱなから不幸にする張本人に出会ってしまったのだ。これから出会う二人を引き裂くと言う重大使命を帯びていると言うのに、やりにくいことこの上ない。

「はああ」

陸橋の上から、流れる車といきかう人々を見る。誰ひとりとして青子を見る者はいない。それは姿を見せていることとは無関係で、この場にいる者は誰も青子知らないのだから当然なのだ。

青子は人間界に降りたことはあっても、人間の知り合いはいないので宿のあてはない。そして人間の世界にはお金という紙や金属が必要不可欠で、それがなければ何も満足に手に入らないと現代人間学で習っているが、方法は働くか誰かの庇護下にはいるという二通りのみ。勿論悪魔にはどちらも選べないし、正直必要ではない。

悪魔は食べる必要がない上、寒さも感じないので外でも眠れるからだ。暗くて狭い場所は正直あまり好まないが、それでもその場所に住めてしまう程度には青子は悪魔だ。だから極端に言えば、彼女には行くあてなんて必要ない。なのにこのとてつもない虚無感は何なのだろう。

帰る場所が必要ないと知っているのに、この夕闇の中で思い出すのはあの屈託のない笑み、なんだかんだと言いあいながら、とても仲がよさそうに見えた二人の横顔だった。

その中にほんのわずかでもいられた自分、あんなに純粋に自分の心配をして笑いかけてくれる人がいるなんて、普通はないのだからこの街を見て思い知らされた。

それなのに、その人たちを不幸にしなければならないなんて。せめて、相手の人間には出会いたくない。リミットまで動き回って、探しているふりをしていれば、二人は出会えるのだから。

(……………それじゃ、ダメ)

何のために自分は人間界に来たのか。そして何のためのラストチ

ヤンスなのか。自分とは何者か？

たった一回恩を受けたぐらいで、仇で返せるぐらいの甲斐性がなくてどうするのだろう。本来そういうものなのだから。そうでなければ待っているのは、消滅のみ。

「青子は……悪魔だから」

自分のあんな穴だらけの嘘を信じてくれた、彼を裏切ることには確かに胸が痛むのだ。彼と新一はともとても仲がよさそうに見えたから、彼の幸せを快斗はきつと望んでいる。けれど

「ごめんね……快斗」

包帯を見ながら青子は呟いた。もうこれで優しい気持ちは終わらせなければならぬ。それがこの世でない場所に生まれついたものの定めなのだ。この世界は善と悪のバランスが均衡になるように出来ていて、自分はそのための1ピースなのだから。

青子はすうつとその場の空気に溶け込むように姿を消すと、適当な廃ビルを探し出して、鉄柱の隙間から潜り込んで、硬くて冷たいその場所であつという間に眠りについた。人間よりも感覚が鈍いというのはひとつある。けれど普段は飛んでいるのに加え、怪我をしている足で歩くのはもう限界だったからすぐにまぶたが落ちてしまったのである。見つかる心配もないようなビルなので、青子は姿を現して思う存分睡眠に浸った。

青子は特殊な場合を除き基本的には目覚めが良い方だ。しかし今日は疲労困憊していたためか、ぼんやりと目を開けたのは、日が昇っても暗がりになるはずだった廃ビルの陰の寢床に、急に光が差し込んだからだつた。

「おい……おいお譲ちゃん？」

「んー青子まだ眠いのー」

「ここはね、お譲ちゃんが一人で寝てていい場所じゃないんだよ。起きてくれるかい？」

困りきった声が聞こえて、肩を何度もゆすぶられた青子は少々乱暴なその起こし方に文句を言いたくなり、意識を浮上させた。

「お譲ちゃん！」

「煩いなー青子は眠いんだって……へ？」

意識がはつきりした途端、あまりにも周囲に沢山の人間の目があるって、青子は目をぱちくりとさせる。

「やっと起きたか……全く近頃の子供はどうしてこう非行に走るのか……」

その中でも一番年を取っているように見えるよれの灰色のスーツを着た中年の男が青子の肩に手を置いてため息をついていた。現状について行けず、面食らう青子を紺色のスーツをびしっと着こなしたまだ青年と呼べる男たちが無理矢理立たせた。足の痛みはもう大分なくなっていたが、逃げようと思って見回すと、いつの間にか青子の左右は彼等にながちりと固められていた。

青子の背中に冷たい汗が伝い落ちる中、一人が中年の男に問いかける。

「警部、この子どうしますか？ 一応署まで連れ帰って、事情聴取をした方がいいとは思いますが、奴のことも含めて」

すると途中までは険しい顔で空中を睨んでいた彼は、急にその言葉を発した青年を見た。

「バカモンっ奴にこんな少女がからんでいるとはとても思えんだろうが。この子についてはワシが責任を持つ。お前たちはこの子を地上まで保護して車に乗せろ、その後は誰か一人でいい、運転を頼む。残ったものはここで引き続き、奴の痕跡を探せっあの日、途中でこのビルに入っただのは間違いないんだっ」

「……ハッ……」

三人分の声が見事にかぶり、さすがに青子も彼等が何をしようとしているのかは分かった。しかし、それでもいまだに青子は、この

状況が飲みこめていなかった。何せ、入るときに人っ子ひとりいない既に廃墟と化してからずいぶん経つだろうこのビルに、人がいる理由が分からないのだ。

おじいさんや子供なら、まだそれぞれ理由をつけて納得できるかもしれないが、こんなまだ若いといえる、軍隊のような人たちに加えて、おそらく隊長と思われる男性など全くの想定外である。

青子は抗議をしようとしたが、青い服の男たちは青子の手をしつかりと掴んでいる。困ったことに彼等はいくということには場馴れしているらしく、その掴む場所にも動きにも無駄がない。三人とも優しそうな顔をしているが、その力を見る限り一筋縄でいきそうになりことは十分推測できた。

仕方なく青子は促されるままにビルの階段を下りて行き、その廃ビルの脇に停められた、二代の白い車のうちの一台に押し込められるように乗せられてしまったのだった。

「う……そ……」

その車のシートに座った青子は顔面蒼白だった。この車は、現代人間の教科書、第六章『犯罪』2項にしっかりと写真が載っていた。人間が罪を犯すと、警察と呼ばれる組織がその人間を連行するのに使う乗り物で、車体の上にある紅いランプがくるくる回りながら点灯し、人々に異常を伝える豪快なサイレン音を鳴らしながら交通ルールを無視して進むことのできる三種類の車のうちのひとつ——パトカーである。

つまり、彼等は警察官ということ。しかし、なぜ自分が連行されるのか、青子にはそれが全く謎だった。まさか悪魔として罪状が取られるはずがないので、何か知らないうちに僅か滞在一日半で、人間の法に引つかかるとんでもないことをやらかしてしまったようである。そう思うと途端に怖くなった。

勿論車を見た途端、この情報は優秀な青子のデータベースの中から引っ張り出され、体が震えて僅かに抵抗を試みたのだが、それす

らも彼らには覚えのあることらしく、強い力に逆らう事が出来なかった。

これからこの車はどこに向かうのだろう。犯罪者が向かう場所と言えば刑務所だが、この車は様々な用途に用いられる。裁判所の可能性も、拘置所の確率も捨てきれない。六章の知識をありつたけ引っ張り出しているうちに、車は滑らかに走り出した。しかしその車内はとてつもなく静かなまみである。青子の危惧していたウーウーと言う耳障りな音は一切なっていない。ずっと耳に手を当てて縮こまっていた青子は、恐る恐る顔を上げた。きょとんと数回目を瞬いた青子に隣に座っていた灰色スーツの男は目元を和ませている。それだけ見ればとても犯罪者に対する瞳には見えなかった。

「連行するわけじゃないから落ち付きなさい」

その言葉にほっと胸をなでおろした青子だが、安心もつかの間だった

「話を聞かせてもらっただけだよ」

彼の言葉に再び恐怖を覚えることになったのだった。

青子が連れてこられたのは確かに刑務所でも拘置所でもなく、警察署だった。先ほど、彼等のウチの一人が「署」と言っていたのはこのことだったのかと青子はぼんやりとする記憶を手繰り寄せて納得していた。

警部が先に降りて、付いてきなさいとの一言の後は自力で歩くことを許された。一応後ろから青年が一人、彼女を追うように張り付いているが、それ以外はごく普通に歩いている。しかし青子の心の中は自由な体とは裏腹に余計に警戒心を強めていくのだった。

警察署と言う事で、安堵しているからだろうか？ 逃げられないからこそ、警備も緩くなっている可能性は否定できない。もしそうでないとしても何を聞くつもりなのか、そちらの方が問題がある。

人間としての知識なら、現代人間学をまじめに勉強したおかげでかなり細かいところまで答える自信はあるが、人間界に来て2日の悪魔には経験不足から答えられない質問だつてある。そう例えば、警部の無線から時折聞こえてきた『キッド』という単語の詳細とか……。

ぐるぐると頭の中でひたすら自問自答を繰り返す青子を差し置いて、男は薄暗い建物の中をどんどん進んで行く。壁も天井も真っ白で、監獄と言ふには綺麗すぎるものの、重々しい空気を彼女に与えるのは間違ひなかった。

ふと彼が立ち止まったのは、一本道だった廊下に終わりが見えた角をまがったときだった。青子は一端考えを中断させ、警部が話す男性を注意深く観察した。そうしたところで、彼の本性まで見えることはないのだが、見える者聞くものが、全て教科書の比ではなく、そうせずにはいられないのだ。

「中森君、なんでこんなところにいるのかね？君は今日、キッドの事後調査に行ったんじゃないかったか？」

「は、確かにそうなんですが、署長。実はその現場に、女子が一人いたもので連れ帰ってきたんです」

警部は、さすがにしきりに頭を下げて話している。白髪の混じり始めた初老の男性である署長は、警部と同じ灰色のスーツを着こなしているが、よれておらず、しっかりとクリーニングされているのが良く分かる代物で、青子はその人物の人柄を見たのだった。かといって、彼女には警部が悪い人間には到底見えないのだけれど、きつちりとした印象は見た目にも心地よいのは事実だった。

「女の子？ ああ、その子かね」

ふいに、彼の優しそうな視線が青子に注がれ、彼女は一瞬身を固くする。しかし、彼は当然のことながら、青子に特別な物を見出すことはなかった。

「はい、これから事情を聴いた後で、親御さんに迎えに来てもらうと思つとるんです。中学生位にも見えますし、もしかしたら、捜索願が出ているかもしれませんから」

彼の目的は今はずきりとしたが、青子は同時にうるたえた。そのために連れてきて、聞いてくるとなれば、当然家族のことだろう。しかし、青子には両親もいない。悪魔にそんなものは最初から存在しないのだ。どうすべきか、青子は考えようとして、もうひとつ大事なことに気がついた。彼女の年である。

中学生と言うと、大体、13〜15歳。しかし、確かターゲットの工藤新一と毛利蘭は、17歳だった気がする。となると青子はもう一段階上の高校生と言うことにした方がいいだろうと結論付ける。いつ何時何が起こるか分からない。少しでもターゲットに近いほうがいい。

「そうだな。よろしく頼むよ中森君。我々警察が凶悪犯罪ばかりではなく、市民の身近な組織であることを、常に形でしめさねばならんから……」応接室は3番を使いなさい。ちょうど開いている」

品の良い笑顔を見せ、署長は歩き去ったのだった。

「ありがとうございます」

中森警部は深々と礼をして歩きだし、青子と彼女の後ろの青年もそれに倣ったのだった。

二人が、応接室03と書かれたプレートが下げられた部屋に入ると、青子の後ろから付いてくると思っていた青年は、彼女の後ろでパタンとドアを閉めた。どうやら入口で待機するらしい。

そのことにまず安心したが、もっと大きな問題が青子の前には立ちだかっていた。

結局考えてみたところで上手い作り話が浮かぶはずもなかったのだ。あまりにも悲劇的なものを作ってしまうと、後で修正が聞か

くなるし、適当に親役の人間を探すなんて青子にはもつと出来ない。何せ実技が赤点なのだ。知識だけ詰め込んだ透明になれる人間と言う方が青子を表すのには的確である。

そんな青子が自信を持って答えられるのは、せいぜい昨日あの廃ビルにもぐりこんで眠ってしまった経緯ぐらいだろう。

「君の名前は？」

「あ……青子です」

「苗字は？」

青子とはつさに顔を伏せた。本当にはないのだが、それを言うことに罪悪感がある。この国では、苗字と名前があるのが当たり前。快斗にも新一にもちゃんとあったのだ。あれだけ時間があきながら、考えていなかった自分には自業自得という言葉しかあてはまらない。「あ、青子は……実は両親がいないんです」

迷った末に、そう言うことにした。嘘ではないので、幾分か話が進めやすいと思ったのである。いや、実際そんな余裕はなかった。青子の頭の中では、六章4項『取り調べ』のページがぐるぐる渦を巻いていたのだから。

下を向いて沈んだ声を出す青子を気の毒に思ったのか、警部の声が幾分か優しくなった。

「そうか、施設には通っていたのか？」

こくりと頷く。

「戻りたくないのかね？」

再び頷く。

「はい……もう二度と……帰るつもりはありません」

その時青子の脳裏に浮かんでいたのは二人の少年たちのいるあの部屋。強く言いきった青子に、警部は少し戸惑っているようだった。彼にしてもこういうことは余り慣れていないのだろう。先ほどから見ている限りでは、彼は『キッド』とかいう犯罪者にかかりっきりの警部の様だから。

「お嬢ちゃん……年は？」

「え、あ…… 17です」

「そうか…… ワシの養女になる気はないかね？」

思わぬ申し出に青子はすぐには言われたことが分からなかった。

「…………… え？」

「いや…… ワシだって、誰かれ構わずこんな提案を持ちかけているのではないんだよ。お前さんぐらいの年だともう施設にも引き取ってはもらえないし、養女を欲しがる家庭はたいていもう少し小さい子供を望む。ワシは警察官で妻にも先立たれて一人暮らしだ。キツドのせいで最近は生活がますます不規則だから、一緒に住むと言うよりは、ワシが下宿の管理人の様に時折帰るだけの家だ。勿論生活費も困ることはないし…………… いや、こんな言い方をしては悪いな」

「……………」

「実はな…… 妻と一緒に腹の中にいた子供も死んでしまつてな。それがちょうど16年前、生きていればちょうどお前さんぐらいの年なんだよ。そう思うと、どうも他人とは思えなくてな。父親としてあの子にできなかったことをしてやりたいと思うんだよ……………」

警部に探るようになつてすぐ見つめられて、どぎまぎしてしまう。

急な申し出だが、青子には断る理由が何もなかった。むしろどこにもつてのない青子にとっては願ったりかなったりな話である。この人間界で、不必要といつてもやはり懂れる衣食住すべてが保障されて、かつ居場所が出来るのだ。

「あ…………… あの…………… 青子でよかったら」

「ただ、家のことはその分任せてしまうことになるが、いいかね。今も男の一人暮らしで少々荒れていて、片づけてもらえるとありがたいんだが。勿論、学校には行かせるし、ずっと娘として大切に思うと約束するよ……………」

「任せて、青子家事は得意だからっ、じゃあお父さんっこれからよろしく願います」

違和感なく言いきつて笑つた青子に、警部もつられて破顔した。

「ああ、こちらこそよろしくな…………… 青子」

それは父親の暖かい笑みだった。

ホームルームが始まる前の教室では男子だろうが女子だろうがざわめくものだ。特に寮のこの男子校において、遅刻してくるなんて物理的にありえないので、本鈴まで大分時間があるこの時間にもクラスメートのほぼ全員が、登校していた。

バカ話に夢中になるもの、登校するだけして、昨夜のゲームの夜更かしからまた寝入ってしまったもの、真面目に勉学するもの、今日の宿題にいそしむもの……。

そんななかで特大の溜息をつく少年がいた。

ぼさぼさ頭は寝癖なのか、もともとのくせつ毛なのか、四方八方にぴんぴんとはねている。それは、だるさを隠そうともしない快斗だった。

「はー」

「あんなあ……朝っぱらからなんでそんななツがいたため息聞かなアカンねん！」

不機嫌丸出しでそういうのは、前の席に座る服部平次だった。快斗は机にだらーと両手を伸ばし、頬をくつつけて、やる気のなさ200%の格好なのだ。見ていても苛立つのか、浅黒い顔の眉間には皺が寄っている。だれだつてこんな態度朝っぱらから見せられたくはないだろうが、それだけではなく、いつも元気な彼がこうでは調子が狂うのである。

「平ちゃん……オレもう駄目、体に力が入らないー」

「だから、なんで快がそんなことになってんねん、理由を言え理由を」

「今日の朝ごはんがアジの開きだったからでしょう？」

溜息をつくことすらなく、読んだ本から目も上げず、さらりと言いつ切る離れた席の白馬探に、なるほどなあと頷きながらも驚く平次。

余談だが、読書中の探に言葉を投げさせるとは相当な出来事である。
「そーそー好き嫌いで自分の朝飯減らした癖に文句言う筋合いねー
だろ」

立つてはいるものの壁にもたれて窓の外を見ているのは新一。彼
の場合、やる気のなさは日常茶飯事だ。

「んだよ、皆して……その分飯をかつくらって来たんで、腹は減つ
てないんですーだ!」

集中砲火に対して子供の様にすねる快斗に新一以外の面々は更に
あきれ顔だった。代表して平次が言う。

「やったら自分、なんでそんなに元氣ないねん。いつものごとく、
ぱーっとマジックでもやって気まぎらわせたらどうや? こっちが
滅入ってまうわ」

「んな気分じゃねーっていうか……」

「だから、断片ばかりごちゃごちゃ言うたらんと原因を言えつち
ゅーとるんじやっ」

ついに吼えた平次に快斗は吐き捨てた。

「……見つからなかったんだよ」

「はぁどういいう事やねん?」

「……別に」

ぶすくれる快斗に代わり新一が苦笑交じりに詳細を説明する。勿
論女子だとはいえないので、とある人間を昨日助けたのだが、なぜ
か急に帰ると言い出して慌てて追いかけた快斗が見失った。という
ことにしたのだが。

「みつからなかったって、君がですか?」

彼が彼であるために必要なスキルである『気配を読む』と言うこ
とに関して、こと超一流であると言う事を知っている探にとって、
この告白は、青天の霹靂だった。分厚い本から彼を引き離し、さら
に彼を凝視させるほどには。

「んだよ、なんか文句あんのか?」

素で危険地帯に行く探を半目で睨む快斗だが、そんな目線にも気

がつかず、探は深く考え込んでしまった。仕方なく事情を知る新一がそれをなだめにかかる。

結果的にその場でたった一人平次が残されることになった。本来お気楽主義の彼だが、さすがにこの居心地の悪さには、我慢が出来なかつたらしい。ただ、彼も新一と同じ探偵というものを名乗っている。新一から、その相手までは詳しく聞いていないものの、快斗と言う人物が単なるマジシャン志望の少年にしては頭の回転が探偵とはまた別のところで速く、人の気配にも敏感であることはよく知っているのだ、これがただ事ではないと分かつていた。

だが、彼は生粋の大阪人で、沈黙には耐えられない。なによりそれが彼にとって一番辛いことなのだ。

「あーもうやめやめ辛気臭いっ」

両手を体の前で大げさに振り、持ち前の腹の底からの声を張り上げれば、二人の探偵とマジシャン志望の少年は一瞬にして視線を彼へと向ける。平次はそれを自覚してから、もう一度大声を出した。

「えーか快斗、人間すぎたことをいつまでもぐちぐち言うとなると、それだけで人生終わってまうんや、お前のリーダーすり抜けたその超人はひとまずおいといて、とりあえず、今は授業受けるべきやろ、1時間目のチャイムそろそろ鳴るんや、さっさと切り替え」

一息で言い切ると、率先して教科書とノート、筆箱を鞆から出していく。それを見ていた三人は、取り残されたのか、正常なのかそれすら分からないままに互いに誰ともなく顔を見合わせた。

次の瞬間一斉に噴き出す。

「な、なに笑ってんねん自分ら、気色悪う」

「いや、だってお前普段はグーカー寝てやがる癖に」

「そうですよ、この前の授業中だって……」

探が嫌みでなく笑いをこらえきれないと、平次は簡単に爆発した。

「誰のせいや思てんねん、こら快っ」

「え、オレ？」

「どっからどう考えてもお前じゃあほんだらっ」

詰め寄る平次がその頭を叩く一瞬前に、快斗は猫のように机から逃げ出して、新一の側にいる。

「やーん平次君が怖いー新ちゃん助けてー」

「気持ちわりいんだよ」

軽く一蹴するだけで、極力無関係を装う新一。しかしその努力が報われることはなかった。剣道の腕に自信がある彼の動きを読み取って攻撃を避けた快斗に対しての平次の驚きは怒りには勝てなかったようだ。

「大体工藤がちゃんと説明せんからこういうことになるんやろっ消えるなんて非現実的すぎるっちゅーねんっ」

「それは飛躍しすぎじゃねえか？」

「うっさいわー」

もはや完全に平次は言えば言うだけド壺にはまる状況にあった。

この時は、誰ひとりとして、今顔を真っ赤にして周囲を巻き込んでいる少年が、演説の際に口走った言葉が、実は真実だったなんて想像もしていなかったのだ。

そして、黒い彼が虚しく怒鳴る中、1時間目のついでに彼等の日常への帰還を告げるチャイムが鳴る。

密かな事実、出会いと共に、二人のルームメイトの中だけに永遠に内包される、ことになる。

しかし、快斗の奇怪な行動は、勿論朝だけにとどまらなかった。というか、彼が普段なら出来る奇怪なことを、いかに無理やりセーブしているかということについての片鱗を見せまくる、という彼にはありえないドジを、連発していた。

1時間目、英語では、普段はつかえつつかえ読む予習をしてきていない駄目高校生を演じている彼が、すらすらとまるで日本語を読むように読んでみせ、あまつさえ、教科書の読みにくさを指摘し、

教師とクラスメートをあつけにとられさせ、2時間目、体育ではぼうつとした快斗をねらったドッジボールを見事な反射神経（まるで猫か豹のようにやわらかい体つきで）でよけゲームを一時中断させる求心力を発揮し、3時間目音楽では探も呆れるほどの難曲を、自由曲ということで無意識に弾きこなし、4時間目の古文では、疲れたのかねむってしまったものの、ぶち切れた教師に当てられると辞書も見ないで教科書のまるまる1ページを完璧に訳した。

そんなあまりの彼の超人ぶりに、昼休みにはこのクラスにもともといる努力天才型の新一から快斗へ、主席の座が移るのではないかという噂まで飛び交う始末だった。しかし、友人達が快斗の周りに群がっても、当の彼は上の空もいいところで、ぼうつと教室や窓の外を眺めているだけで、心ここにあらず。徐々に離れていく友人達遠巻きに見ていても今の彼は、少しどころかなり不気味だった。

「マジでお前……どうした？」

結果的に周囲からの無言のヘルプコールを受けた新一が、快斗に溜息交じりに問いかければ、快斗は一瞬新一をちらりと見て、またぼんやりと教室を見る。

「……わかんねえ」

「は？」

「なんか……つまんねえんだ」

「？ 何が？」

「……昨日までそんなこと思いもしなかったのに」

はーと溜息を吐く快斗を見て、その言葉が、新一の質問に対する答えではないと知った新一は言葉を失い、天井を仰いだ。そして快斗がこうなった正確な時を、新一ははつきりと言い当てられる。そしてその原因も、きつと間違ってはいないだろう。

しかし、それをこいつに言うのはとても癪なのだ。

第一自分が受け入れられていない。そんな状況で言うのは快斗にも己にもよくない気がした。そこで新一は、実力行使に出る。

「……なあ快斗……お前の超人っぷりがこれ以上発揮されると、困るのお前じゃねえのか？ さっき職員室の前通ったら、留学だ云々言ってたぞ。別に止めやしねーけどこれからやり辛くなってもオレのせいじゃねーからな？」

「なっつ」

快斗が本気になれば、実はアメリカの一流大学でも主席が取れるのだと言うことを知っている新一からの助言、これが届かなかつたらもはやなにも届くまい。そう思っていた彼の行動は功を奏し快斗は今初めて新一を新一と認識したようだった。

それはそうだろう、快斗が今までひた隠しにしていたのは、幼い頃からの苦い経験故なのだ。

ひとよりも少し頭がよい程度ならば尊敬もされるだろうが、小学生で既に微分積分の定理を理解してしまうほどでは輪にはとても入れない。逆に言えば、それだからこそ新一とのつながりも生まれたのだが、快斗にとって高すぎるIQは、怪盗をする時以外は無用の長物だった。

「……ま、頑張れよ。午後からもそんなんじゃ、明日にはおめー海外行きの飛行機の中だろうぜ」

「……」

そして危機感を覚えた快斗は、5時間目の化学では、計算式を済んでのところの間違えるというばかりかをやらかし、6時間目の美術では、奇妙なオブジェを作り上げた。ちなみにそれは彼曰くテーマポールらしいのだが、とてもそうは見えず周囲の失笑を買うものだった。

当然クラスメートからは散々問い詰められたが、それでも快斗はあくまでもシラを切りとおし、いつものようにおどけてマジックショーを始めるのだった。

クラス中が興奮の渦に包まれる中、新一を鋭いまなざしで見つめ

る目が二対。当然それに気がついていた彼は、後でなと返事をして、あとはもう快斗のマジックに見入るのだった。日本警察の救世主と歌われた彼に、こんなおだやかな放課後はそう何日もあるものではなく、その中で彼のお気に入りの中のシヨアが見れるとなれば、さらに確率が下がる。もう自分でもタネが分からない。そして皆の輪に入るどころか、中心となれる秘密兵器、快斗の最高のマジックを新一は純粋に楽しんでいた。

そして放課後の体育館倉庫。

部活で使う人間があらかた道具を取り出した頃を見計らい、さつさと帰ってしまった快斗にはばれないように、新一、探、平次の三人は、男三人むさくるしい場所で三角形の頂点にそれぞれ無言で立っていた。

「……で？」

長い沈黙を破った平次の台詞に、新一はたまらずに苦笑する。平次はさらに苛立ち募らせたらしい。もともと、彼の超人振りを知らなかったうちの一人だ。多少頭が切れるといっても、あそこまでとはとても思っていなかったのだろ。いや、新一ほどではないといつても聡い彼のことだから、本当にあれが片鱗であることを、見抜いている確率の方が高い。

「工藤……知つとつたな……」

じろりと睨まれて、新一は漸く笑いを納めた。さすがにこれ以上笑い続けるのは不謹慎だ。

「ああ、知ってたよ……だけど別にあいつが言うつもりないなら、良いかと思っただけだ」

「はっ快がどんな能力持つとるかなんて、そんなんはどーでもええわ。なんで隠す必要があんねん」

思っただけの切り返しに新一は肩をすくめる。高校生で、しか

も大分人間が出来上がっている彼等が、今更そのことで快斗をのけ者にするなどは、新一だって思っちゃいない。面倒なことになるという認識はあったものの、それもまた別次元だ。

「あいつは結構繊細なんだよ。何かを守るためならいくらだって仮面を被るさ」

「ふーん、ならそれはそれでええわ。後は快に直接話すことにしようか」

ここで一応の決着を見た、と思いたい新一は彼らの方をじろりと見た。

「そのためだけに呼び出したのか？」

「工藤君、ごまかさないで下さい。普段は完璧に演技していた黒羽君があれまでになった理由を、貴方は知っているんでしょう？」

すつと人差し指を自分に向かって伸ばされると、あまりいい気がない。犯人扱いされているみたいだ。新一はふつと目線を逸らした。自嘲的な笑みと共に

果たして言うてしまっただけで良いものだろうか。自分は確信しているが、その正体を知らず、もっと悪いことに本人は無自覚ときている。しかもその出会いは、ありえないといわれるこの男子校のできごとだ。

結局彼は慎重に言葉を選び、どうでも良いことのように切り出した。

「……なあオメーら、一目ぼれって信じるか？」

「…………は（あ）？」

間抜けな大阪人の高い声と、呆けた常識人の声は、トーンこそ違うものの、見事にシンクロしていた。

「だ、誰にやねん」

「そうですよ、今更この学校で一目ぼれって、町でも歩いててですか？」

「ま……そんなとこだろ。とにかくオレが言えるのはこれだけ。あいつある女の子に会って、別れてからずっとあんな感じだからって

「いうあくまでも推測の域」

よどみなく言い切った新一が黙ると、しばらくその場には、重たい沈黙が流れた。バスケ部がボールを打ち付ける、ダムダムという音がやけにはつきりと聞こえるほど。

「あの快が……信じられへんわ」

「同感です。女性には皆平等に接してるイメージがあつたのですが……」

二人とも、盆と正月がいつぺんにきたような顔をして、この場にはいない親友に思いを馳せるのだった。

「オレだって無理だよ。だけどお前なら分かるんじゃない？ 遠山さんいるんだし……」

「だ、誰がやつ和葉はなあっ全く関係ない幼馴染ッちゅーだけの――」

「この前デートだったくせに」

「……ちやうつあれば、和葉がどうしても言いよるからっ」

言い逃れようとする彼に、探は一気に畳み掛けた。

「普通それで、大して興味もない人物の個展なんか行きませんよね」
「だな」

「お前らえー加減にせえ！！」

顔を赤くして怒鳴つても、全く説得力のない平次に、探と新一はにやりと笑った。

「ま……服部のことは置いといて……どっちにしろきつともう二度と会えないだろうな」

「どうしてですか？」

問いかける探に、新一はあっさりと言つぶやいた。

「その子、迷子だったんだよ」

「はー……なるほど」

もう出会えるかすらも分からない少女に対して出来ることは無い。それが男子校の寮生活という籠の鳥の中の彼等の日常。

3・思い出にはまだ早すぎる（後書き）

一応時間軸説明です……。

今朝……青子と中森警部の出会い

昨日……快斗と新一と青子の出会い

おとつい……キッドの予告日。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8910x/>

devilangel

2011年10月26日16時08分発行